

## 源氏物語の女性たちの「幸、不幸」について

前 兵庫県立川西北陵高等学校 小田 剛

2024年の大河ドラマの主人公は、紫式部である。

その紫式部が精魂を傾けて書き上げたのが源氏物語である。未完であるとの説もあるが、紫式部は、もう書くべきこと、書きたいことは書き終えた、もうこれで充分だということで筆を置いたのだろう。そうして何を初めに書いたかについて、池田亀鑑は、藤壺と源氏との運命的な恋愛を描いた「かがやく日の宮」ともいうべき巻があった。さらに源氏物語は、「女のために女が書いた女の世界の物語」と述べる玉上琢彌は、はじめ「若紫」の巻が発表され、それがもとで紫式部は藤原道長に召し出されたといわれる。また若紫系と玉鬘系の問題もあるが、それはさておいて、源氏物語には、いろんな側面がある。主題は、「光源氏の罪と罰」であるが、女の「不幸」を描いたともいわれる。いうまでもなく、「幸（福）、不幸」は考え方次第であるが、ここは、一般的な社会通念に従って書いていきたい。

幸せの第一は、明石の君（上ではない）ではないか。国司・受領階級の出であり、須磨流謫

の光源氏との間に姫君を儲け、これが国母となる

というシンデレラストーリーであるが、光源氏はまさに道長の立場であるといえよう。そのために卑賤の我身をかえりみて、姫君を紫上の養女とせざるを得ず、生木をさかれるごとく、離別させられ、姫のために、我身はひっそりと大堰川のほとりで隠れ住むことになる。後には、源氏の六条院の冬の町にむかえ入れられ、その女主ともなるが、身分上、終生我身の程をわきまえねばならなかった。この明石の君の一生は、忍従苦悩に覆われ、それを代償として明石一族、及び自らの「幸せ・繁栄」がもたらされたのだといえよう。次は、玉鬘。周知のごとく、夕顔と頭中将との子であり、現世利益の観音の存在する長谷寺において発見され、光源氏の六条院にむかえとられ、そのヒロインとなる。源氏は、亡き夕顔の面影が玉鬘に二重写しとなり、一線を越えようとするのだが、分別盛りであり、正妻紫上のこともあって、結局のところ越えない。

この二重写しの型は、この例のみならず源氏物語にきわめて多くみられる。玉鬘の黒髪

を手まさぐりしつつ、あやくな思いかみし

めるといふ場面は、和泉式部の名歌「黒髪の乱れも知らずうち伏せばまづかきやりし人ぞ恋しき」（後拾遺、恋三）や、その本歌取り歌・定家の「かきやりしその黒髪の筋ごとのうち伏すほどは面影ぞ立つ」（新古今1390、恋五）。が、隠岐本新古今では除棄）の秀歌が想起される。源氏も仕方なく、婿選びに苦心しているところに、鬚黒の大将が略奪し、自邸へ住まわせる。その結果、北の方は実家へ帰るといふ、現在でもよくある話となる。そして玉鬘はどんどん子を産んで、玉鬘物語は終了する。亀井勝一郎も『愛の無常について』において、恋愛小説で、「結婚して別れた」、「子ができて別れた」以外のストーリーがあるのかといっている。三人目は中君。詳しい経緯は省くが、匂宮と結ばれるが、正妻ではなく、妾に甘んじなければならぬ運命をかみしめるが、子を為して、ストーリーは終わる。

他にもあろうが、「幸福」な女性はいくらにないか。では「不幸」な女のほうへ参ろう。

まず源氏の母の桐壺の更衣。彼女は大納言の女であるがゆえに、身分上更衣（どまり）であり、その父も今はなく、母と帝（桐壺）の愛だけが頼りという弱い立場にある。帝の愛を独占するがゆえに、他の女のねたみ、そねみ、をうける。壺の位置も清涼殿から最も遠い場所にあり——そのことは身分の低さをあらわす——、彼女が帝のもとに参る時に、陰湿な、いじめ・いけず、例えば、糞尿をまきちらされることなど、にあい、その結果ストレスをかかえ、光源氏を生んだあと、若いみそら（おそらく20歳ぐらい）で亡くなる。母の死んだ時、源氏は3歳であったのだ。同様に紫上も幼くして母を亡くしている。近代では川端康成も早く肉親を多く失っているのは周知の事実である。次は藤壺。桐壺の更衣に面影が通うというので、宮中に召され、その結果、帝の悲しみも薄らいでいく。藤壺という名・位置でも分かるように身分が高い（先帝の女）、最高の女性である。それゆえに紫上同様、もう一つ描ききれていないという評がある。六条御息所など、舌なめずりをして、喜びいさんで作者・紫式部は描いているという評者もいる。神仏に最も近い、理想的な最高の男性である光源氏と結ばれる。最初に述べたごとく、源氏物語の主題は、「光源氏の罪と罰」であろうが、他の問題提起は、「最高の男性（光源氏）は女性を幸せにしようか」であると私は思っている。そうして藤壺は帝の愛を独占

するが、光源氏との間に子（冷泉）を為す。が、藤壺は不義密通——それは近松の姦通物「堀川波鼓」「鍵の権三重帷子」などに通ずるものである——の罪（の意識）におびえ苦悶してストレスをかかえた果てに、とうとう若くして出家（29歳。「賢木」）し、死去（37歳・女の厄年。「薄雲」。ゆえに藤壺を薄雲の女院という）することになる。その形代・身代わりが若紫・紫上であり、彼女は影の如く源氏に寄り添い、源氏と終生苦楽を共にする。よく紫のゆかりといわれるのは、桐壺、藤壺、紫上の系譜であり、それでいくと、藤壺の父の女の子であるがゆえに、女三宮もその系譜につらなるといえよう。三人目は葵上である。左大臣の女で、源氏にとっては、姉さん女房、添い臥しの女性である。左大臣は、臣籍降下した源氏の後見・後援者としての存在であり、いわば政略結婚といえよう。このゆえに源氏は右大臣（側）と対立する立場に立たされたといえる。シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」のモンタギュー家とキャピュレット家に相当する。葵上は、先述の藤壺と二歳しか違わず、源氏についていえば、藤壺は5歳、葵上は4歳上である。義理の母と正妻が一歳しか違わないというところに、一夫多妻制のシステムの危険がある。さて、葵上は左大臣の女ゆえのプライド、気位が高く、源氏とうちとけず、それゆえの源氏の恋のアバンチュールもあるわけだが、周知のごとく、六条御息

所の生霊によるうわなり打ちにあつて、葵上は夕霧を生んで、27歳時に急逝する（「葵」）。次は、今述べた六条御息所である。生きては生霊、死んでは死霊となつて、源氏の愛人たちに祟る。夕顔（六条院の霊による死という説もある）、葵上、死んでは紫上、女三宮と祟り続け、なかなか魅力あるキャラクターである。謡曲、小説、戯曲などに多出する由縁である。先述の舌なめずりではないが、「天国はこの上なく退屈である。地獄はたまらなくおもしろい」などという言葉が頭に浮ぶ。この女性も源氏より年上（7歳）であり、どうも源氏物語では、年上は不幸になるようである。斎宮となつた女と伊勢に下り、その後、その女が秋好中宮となり、六条院の秋の女主人となるのである。源氏と藤壺の子である冷泉と、この秋好中宮の間に子はいない。そして六条御息所は亡くなる時（36歳）、くれぐれも源氏に女・秋好中宮のことを頼み、それと同時に女に手を出してくれるな、私のような悲しい思いをさせたくないと言を告げる。そして源氏は、魅かれながらもその言を守るといふことになる。次はいよいよ紫上である。先述のごとく源氏と一生、苦楽をともにし、最高の幸人ともみられようが、二人の間に子はない。明石の姫君を養女とし、いわば姫君の育ての母である。多くの人に見守られながら亡くなるのであるが、作者・紫式部（？）は、物語の上で、子を儲けなかつたのである。

子を儲けることによって、物語（恋愛小説）が終結するのを防いだともいえよう。その紫上は、ゆるぎない秩序を有する六条院の女主人として、苦悩もなく、めでたしめでたし（「藤裏葉」・31歳）で終わるはずであったが、前述のごとく、諸事情により、女三宮が六条院に降下することになり、衝撃をうけ、微妙に源氏の愛情を信じられなくなり、傷ついていく。出家を願うが、

源氏は許さず、43歳で息を引き取った（「御法」）。その女三宮であるが、少々おつむの弱い、幼いところがある。端近にいて、柏木に姿を見られたことなど、その一端である。それゆえに父親である朱雀院は気がかりであった。結局は親以上に年の違う、一番託すにふさわしい源氏にゆだねることになるのであるが、源氏39歳、女三宮13（14）歳、26（25）歳の年の差という父の年上の兄ともいえる存在の夫であり、どう考えても普通とはいえない。が、源氏のほうは若くやんごとなき姫君を得られるのだから、男として悪い気はしない。紫上を気にしつつ、女三宮の許にむかうが、そこで見出したのは、若紫のその頃と比べても、あまりにも幼い女三宮であった。そのことに一面安堵もするが、幻滅を味わわれたのは疑いがない。が、かねてより恋慕していた柏木に、思慮のなさから姿を垣間見られ、その結果、柏木は火に油を注ぐのごとく、ますます思いをつのらせてゆき、6年後、密通し、女三宮は薫を出産する。そして源

氏はまごうことなき証拠をつかみ、二人の秘密を知った。その拳句、柏木は源氏に強烈な皮肉を浴びせられて病に陥り、やがて亡くなる。女三宮も、真綿で首をしめられるがごとき源氏の態度に苦悶しつつ、父に頼んで22（23）歳時に出家してしまうのである（「柏木」）。

最後に宇治十帖をみよう。主人公の一人である大君は結局薫と結ばれることなく、結婚を拒み、26歳（総角）で世を去る。その大君に面影の通う浮舟は、八宮と中将の君（北の方ではない）との女である。彼女は匂宮と薫に愛され、懊悩の末、急流の宇治川に入水しようとするが、果たせず、恵心僧都、源信とされる横川僧都に、意識不明のところを発見され、やがて後に懇願して出家する。浮舟らしいとの噂を聞いた薫は、浮舟の弟である小君を介して手紙を託したが、浮舟は返事もせず、薫は疑念を抱く（「浮舟23歳」「夢浮橋」というところで、54帖の大河ドラマである源氏物語は幕を閉じるというわけである）。

紫式部も、3歳頃に母を亡くし——光源氏と同じ——、27歳頃に、当時としては結婚適齢期よりはるかに上で、20歳ぐらい年上の、親子ほど年の違う藤原宣孝と、それなりに本人の意思はあったであろうが結婚し、娘・大式三位（賢子）が生まれる。そして結婚2年後に夫が病死する。その頃より、心の空白を埋めるために源氏物語を書いたとされ、それが好評を博したそ

の縁で、道長の女である中宮彰子のもとに出仕し、やがて紫式部日記にみられるような宮仕えの後、42歳ぐらい（異説あり）で亡くなったとされている。その紫式部の生涯は謎だらけであるが、ともあれ源氏物語が、池田亀鑑や秋山虔などの説のごとく、一女性の手によって全体が成立したことを飲みたい。

そして繰り返すことになるが、まとめよう。冒頭の主題、問題提起、「光源氏の罪と罰」、「最高の男性（光源氏）は女性を幸せにしうるか」に戻ると、六条院という「生ける御仏の国」において、まさしく光源氏が太陽であり、春夏秋冬の女性達が調和をもって生きていく。最高の女性・藤壺（母に似る）の形代である紫上と春の町で暮らす光源氏は、栄耀栄華を極め、「藤裏葉」において、めでたしと大団円を遂げるはずであった。が、執念き紫式部の作家魂（散文精神）は、ここに女三宮の降嫁という出来事を設定して、かくも強固な六条院世界の崩壊を図る。その大作業が「若菜」の巻を下に分けるほどの巨大な分量を要求する。源氏物語という作品が、作者にそれを求めたのだともいえよう。

今まで身分上どの女性よりも上位であった紫上は、院の女という、この上なくやんごとなき姫君の降嫁によって、No.1夫人（いわば正妻格）の地位より転落すると同時に、今まであれ程強固であった、源氏への信頼が微妙に揺らぎ

始める。光源氏は光源氏で、はるか年下の若く高貴な女性が、イヤであるはずもなく、また男として社会的な立場からも、女三宮を無視するわけにもいかず、紫上を置いて、通うことになる。後、紫上は発病し、思い出の二条院に病氣治療のため移る。そしてこのすきに柏木は女三宮と密通し、薫が生まれる。薫は自らの出生の陰りにそれとなく気付き、大君や、その形代の浮舟に思いを寄せるが、大君は夭折し、後には浮舟も出家する。つまり女の幸せは、この時代、男によって与えられはしなかったのだ。男支配の社会・世に対する紫式部の絶望が、物語の背後から漏れて来るようであり、それが紫式部の結論ではなかったろうか。つまり「光源氏の罪と罰を通して、女の不幸を描いている」といえる。

次に少し視点を変えて、源氏物語の和歌について述べていこう。これも今まで述べてきたことと関わり参考となるはずである。私は、源氏物語は極端にいえば、古今集と伊勢物語からできていると思っている。もともと源氏物語が一番多く引歌として用いているのは、親心を歌った「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(後撰、雑一、兼輔)である。そして紫式部は歌人としてはさほど評価されていない。あくまでも物語・散文作家とされている。が、百人一首には57「めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬまに雲がくれにし夜半の月影

(「かな」の本文も多い) (新古今1499、雑上) がとられ、幼友達と久しぶりにあいながら、ついちよつと会っただけで入る月と先を争うばかりに、あわただしくその人が帰ってしまった(新古今の詞書) 名残惜しさを詠んだ別れの歌である。紫式部集の冒頭歌でもある。そして源氏物語中の歌は、一首としてはさほど光つていとは思えないが、歌が散文・地の文に融合・調和してこの上ない効果をあげている。例をあげよう。まずは「桐壺」から。

限りとしてわかるる道のかなしきにかまほしきは命なりけり

桐壺更衣の歌である。地の文は省略するが、死を目前にして帝や幼い子(光源氏)を残して逝く我身を悲嘆する。「行く」に「生く」を掛け、もう死んでいかねばならない悲しい我身はもつと生きたいと、生への執着を訴える。そうして亡くなった後、

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩が本を思ひこそやれ

という、帝が更衣の母にあてた歌がある。宮中で涙にくれている私(帝)がいて、更衣の母のもとにいる若宮・光源氏のことを思いやっているといるものである。以下、「空のうち曇りて、風冷やかなるに、いといたくながめ給ひて、見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつまじきかな」とひとりごち給へど、えさしいらへも聞こえず。」(夕顔)。夕顔が亡くなった後の

光源氏の独詠歌である。あの人の火葬の煙を雲とみると、夕暮の空までも慕わしく感じられると、夕顔を追慕する光源氏の心情がしみじみと感じられる歌である。もう一首「橘の香をなつかしみほと、ぎす花散る里をたづねてぞとふ」(花散里)。このように歌が巻名になつていものも多い。源氏の歌であり、有名な「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今、夏、読人しらず)で知られる、昔の人を思い起こさせる橘の香がなつかしいので、時鳥(私)が橘の花の散るこの邸(あなたの許)に探しやってきたと、父の故桐壺院の女御、麗景殿女御を訪ね、さらにその妹の三の宮・花散里を歌っているのである。以上このように少ない例ではあつたが、柿本人麿の長歌に対する短歌、松尾芭蕉の連句における発(俳)句と同様な位置にあるのが、源氏物語の文章・散文と歌といえようか。芭蕉の『おくのほそ道』における文と句もそれに相当しよう。『国破れて山河あり、城春にして草青みたり』と、笠うち敷きて、時のうつるまで涙を落しはべりぬ。／夏草や兵どもが夢の跡(平泉)。

千年前に、社会・世の中とは何か、人とは何か、男と女はどうあるべきか、どう生きるべきかを鋭く考察し、さまざまな問題提起をしている源氏物語に、これからもむきあつていきたい。